

【ポスター発表】

**「限界」集落における課題とストレングスの可視化**

—テキストマイニングによる自由記述回答の探索的分析—

○ 駒澤大学 荒井 浩道 (5909)

川村 匡由 (武蔵野大学大学院・303), 島津 淳 (桜美林大学・1809), 豊田 保 (新潟医療福祉大学・2602),

小野 篤司 (宇都宮短期大学・5849), 石川 陽一 (株式会社生活構造研究所・8297)

[キーワード] 限界集落, ストレングス, テキストマイニング

**1. 研究目的**

「限界」集落は、高齢化率が50%を超え、コミュニティの維持が困難になった集落と定義される(大野 1991)。国土交通省の調査によれば、「限界」集落数は7,873で、このうち10年以内に消滅する集落数は423、いずれ消滅する集落数は2,220、2050年には人口が現在より半減する地点が全国の66.4%になると予測されている(国土交通省 2011)。また、「限界」集落の深層では、地域住民がそこに住み続ける意味や誇りを見失う「誇りの空洞化」(小田切 2009)が進行し、「何をやってももうだめだ」という諦観がコミュニティ再生の可能性を遠ざける。このように「限界」集落は、人口減少社会の進展に伴って「問題」として発見された。

ところが、近年、このような「限界」集落論が問い直されている。例えば、「限界」集落の首長や住民は、不用意に危機感を煽り、コミュニティ再生の気運に水を差しかねない「限界」という呼称の見直しを求めている。また、山下(2012)は、「限界」集落が「問題」と位置づけられてきた政治的背景を批判し、既存の「限界」集落論は、住民の生活実態を反映していないと指摘する。「限界」集落への効果的な支援を展開していくには、当事者である住民の声に耳を傾け、課題だけでなく、ストレングスにも注目する必要があるだろう。

以上を踏まえ、本研究では、「限界」集落の住民を対象としたアンケート調査の探索的な分析を通し、コミュニティソーシャルワーク的支援の可能性を検討する。

**2. 研究の視点および方法**

本研究の特徴は、「限界」集落をフィールドとし、そこにおける課題とストレングスの両面に注目する点にある。しかし、「限界」集落を対象とした標準化された質問項目は開発されていない。また、「限界」集落のストレングスを評価した先行研究の蓄積はほとんどない。このため、本研究の目的を達成するには探索的な分析を行う必要がある。

そこで、本研究ではアンケートの半構造的な自由記述回答を対象に、自然言語処理(Natural Language Processing)技術を応用したテキストマイニングの手法を用いて潜在的な課題とストレングスを可視化するための分析を行った。また、分析を補足するため、住民を対象とした半構造化面接によるインタビューのデータを用いた。

本研究では、調査地として群馬県甘楽郡南牧村を選定した。同村は高齢化率 56.5%、少子比率 4.0%と（平成 21 年 4 月）、少子高齢化が全国で最も進んだ自治体である。同村の全世帯（1,114 世帯）を対象に、住民生活に関するアンケート調査を実施した（平成 22 年 11 月、有効回答率 64.7%、自由記述有効回収数 207 件）。分析に用いたテキストデータは、「改善すべきところ」、「良いところ」を尋ねる設問に対する自由記述回答である。

分析に用いたソフトは、Text Mining Studio 4.1.0（株式会社数理システム）である。形態素解析と構文解析によるデータの前処理後、名詞、動詞、感性語に注目した頻度解析、クラスタ分析、対応分析、ネットワーク分析、評価分析などを行った。変数としては、性別、年齢、居住地区、幸福度などの回答者の基本属性と一部の質問項目を用いた。

### 3. 倫理的配慮

本研究の実施にあたっては、一般社団法人日本社会福祉学会「研究倫理指針」に従った。アンケート調査、インタビュー調査の実施にあたっては調査対象者の承諾を得た。個人が特定される恐れのある居住地区については、固有名詞の使用を避けた。テキストマイニングの分析においては、ソフトに付属する個人情報保護機能を用いた。

### 4. 研究結果

形態素解析・構文解析の結果、テキストの基本情報は総行数 414、平均行長（文字数）12、総文数 585、平均文長（文字数）8.5、延べ単語数 1,878、単語種別数 795 であった。頻度解析、クラスタ分析、対応分析、注目語分析、ネットワーク分析、評価分析の詳細な分析結果については発表当日に提示する。

### 5. 考察

調査地とした南牧村では、課題として、若年者の就労先の不足や後期高齢者の日常的な移動手段の不備、地域包括ケアの実施の難しさなどがある一方、ストレングスとして、生活満足度の高さや住民・家族のつながり、豊かな自然、空き家、お金のかからない生活様式、災害時の共助の意識、また、支援の方策として、美味しい水や炭うどん、山の斜面に石垣を積み上げた元養蚕農家群、浄瑠璃人形等、県文化財や観光資源を活用したコミュニティビジネスの展開など、ストレングスに注目した課題解決の可能性がある。

#### 文献

- 国土交通省（2011）「国土の長期展望（平成 23 年 2 月 21 日）」。
- 小田切徳美（2009）『農山村再生—「限界集落」問題を越えて』岩波書店。
- 大野晃（1991）「山村の高齢化と限界集落」『経済』7, 55-71。
- 山下祐介（2012）『限界集落の真実—過疎の村は消えるか？』筑摩書房。

#### 謝辞

本研究は、平成 22 年度独立行政法人福祉医療機構社会福祉振興助成事業「限界集落・自治体の地域コミュニティ再生事業」（福祉デザイン研究所、所長：川村匡由）の助成を受けたものである。また、データ集計は、野上隆憲氏（有限会社地域政策ネットワーク）の協力を得た。